キャンパス・コラム

「デジタル放送の宣伝内容に疑義あり」

この短文は02年冬季オリンピック開始前日に書いている。テレビは、W杯サッカーも絡めてBSデジタル放送の宣伝に熱心である。特にNHKは「ハイビジョン放送」という呼称でこのメデイアの特徴を説明している。しかし、その宣伝内容に対して少し意地悪な「疑問」を呈しなければならない。

NHK（に限らないが）は、この２年間、①高画質・高音質、②データ放送、③双方向コミュニケーション、の３点を強調してきた。以下では、とりあえず③のみをとりあげ、コミュニケーション理論による少し意地悪な意見を述べてみる。

③については、ご存知と思うが、クイズ番組中の「答え」＝選択肢を視聴者がリモコンのボタンを押して回答することが可能であるから、従来のテレビの一方向的コミュニケーションとは異なる双方向コミュニケーションが出来るようになったという。けれども、テレビの画面に映っている特定の記号を選択するのは、厳密には＜反応＞行為であり、反応＝発信型コミュニケーションというべきだろう。それは交通信号に反応する行為と似ており、正確な意味における双方向コミュニケーションではない。双方向的な交信コミュニケーションでは、受信信号を解読・解釈した結果で相手に発信する。相手（は今度は受信者である）はその受信結果から次の発信（反論、同意、無視などの）行為を行うだろう。

つまり、双方向交信というのは、コミュニケーションの当事者が「交互に」受信・発信を繰り返す「相互行為」であり、ときには相手の発信を「抑止」することもある。したがって、放送の「送り手」と「受け手」が常時立場を交代して相手に反応・影響し合い続けることなど不可能である。というわけで、デジタル放送が双方向コミュニケーションを可能にするというのは、どうやら「疑問」であるばかりでなく相当に「嘘」っぽいのである。テレビ電話での交信なら話しは別であるが・・・。

広報委員　早川善治郎（文学部教授）

編集後記

「９月11日をもって21世紀が始まった。これによって国際関係の分解と組み替えが起き始めた」。昨年、アメリカの同時テロ発生時、日本のある作家がいった言葉だ▼乗っ取られた飛行機が貿易センタービルの北タワーに突っ込み、20分後には南のタワーに別の飛行機が突っ込んだ。アメリカン・パワーの象徴ともされたツインビルの〝５万人都市〟は、たった１００分で消滅。約３２００人の死者、行方不明者が出た▼ハイジャックした飛行機で乗客もろとも突っ込むという、まさかの手口。世界に同時テロの戦慄が走ったのも当然だった。以来、それまで好況のアメリカを打ちのめし、世界中が後遺症を引きずっている。その最たる国が日本だろう。就職内定率は相変わらず厳しい。年々、大きな負荷を背負って巣立つ学生は、めでたさも中ぐらいの心境だろう▼人々は〝戦争の世紀〟といわれた20世紀には懲りた。そこで「21世紀こそ平和に」というのが、地球人61億人共通の願いのはずだ。01年９月11日午前８時45分をしっかり胸に刻み込んで社会に出ていくのも、21世紀人の立派な自覚ではないか。お元気で。**（広報課）**

Hakumon ちゅうおう

2002・卒業生号（第173号）
2002年（平成14年）３月25日発行

発　行　　中央大学広報委員会
〒192-0393 東京都八王子市東中野742-1

〈編集担当〉広報課　☎0426－74－2146
印　刷　泰成印刷株式会社
〒130-0026 東京都墨田区両国３－１－12
電　話　03-3631-8141